

現行幼児知能検査の吟味

幼児の知能測定における問題点（その二）

井 上 範 子

種々の幼児用団体知能検査を実施してみるとその結果にはかなりの変動のあることが認められた（このことについては前回で述べた通りである）が、その変動の要因がどこにあるかについて次に考えてみたい。

一、ことばの聞き方テストとの関係

普通の保育や、テストを実施してみていることは、話をよくきいていないため質問された内容がわからずできないとか、きいていても的確にききとっていないために解答が中途半端になるということが多い、ということである。

そこで変動の要因としていろいろ考えてみたが、幼児の場合聞く態度に問題があるように思われたので、まず聞く態度との関係をみることにした。しかし聞く態度をテストする適当なテストがないの

で、ことばの聞き方テストを利用することにした。もちろんこのことばの聞き方テストも知的なものが含まれており、ここでいう聞く態度のテストではないので、問題はある。しかし聞く態度がある程度知ることができると考えて、便宜的にこれを使用して見た。

いろいろの知能検査を各個人に試みた結果の変動の分散状態と、ことばの聞き方テストの関係を表にしてみると次頁の第1表の通りである。

この表でも明らかなように聞き方テストの悪いもの（聞き方テストの段階1・2のもの）の知能段階は、殆んど三つ以上の段階に分散しており変動が大きい。また知能段階が一つまたは二つの段階に集まっている子どもの聞き方テストは、一、二の例を除けば聞き方テストの段階は3以上になっている。この一、二のものは皆普通以下の知能の子どもである。

第1表 知能段階の分散状態とことばの聞き方テストとの関係

数字は人数を示す

聞き方テストの段階 知能段階の分散	昭和36年度						昭和37年度					
	5	4	3	2	1	計	5	4	3	2	1	計
1つの段階に集っているもの	1	1				2	2	2				4
2つの段階に分散しているもの	10	12	7	2	1	32	9	21	14	1		45
3つの段階に分散しているもの	9	17	24	8	3	61	16	28	25	13	2	84
4つの段階に分散しているもの	2	14	14	12	3	45	3	8	8	6	2	27
5つの段階に分散しているもの				2	2	4	1	1			1	3
計	22	44	45	24	9	144	30	60	48	20	5	163

第2表 知能段階の分散状態とことばの聞き方テストとの関係

(T-score で換算したもの)

数字は人数を示す

聞き方テストの段階 知能段階の分散	昭和36年度						昭和37年度					
	5	4	3	2	1	計	5	4	3	2	1	計
1つの段階に集っているもの		1	2	2	1	6				1		1
2つの段階に分散しているもの	9	6	13	5	1	34	11	19	15	3	1	49
3つの段階に分散しているもの	10	27	26	15	5	83	6	30	23	8	2	79
4つの段階に分散しているもの	3	9	4	2	2	20	3	11	10	8	2	34
5つの段階に分散しているもの		1				1						
計	22	44	45	24	9	144	30	60	48	20	5	163

次にこれを T-score で換算したものである。この表についても大体前のようなことが言える。即ち聞き方テストの悪いものの知能段階は三つ以上の段階に分散するものが多く変動が大きいといえる。しかし聞き方テストの悪いものの中でも約二割のものは変動が少ないが、個々についてみると一般に知能が普通以下の子どもである。一方知能段階が一つまたは二つの段階に集っている子どものうち知能段階が1か2のものを除けば、一般に聞き方テストの段階は3以上になっている。

さきにも述べたように、この聞き方テストには多少知的なものも含まれているので、知能程度の低い子どもを除けば、一般に聞き方テストの悪い子ども（聞き方テストの段階が1・2の子ども）は変動が大きいということが言える。したがって聞く態度が変動の一つの要因として考えられる。

二、養育態度、家庭環境、健康、性格などとの関係

それでは聞き方テストのよい子どもは皆変動が少ないかというところも必ずしもそうではない。とすると聞く態度以外にも変動の要因があるはずである。それはいったい何だろうか？

そこで聞き方テストがよくて変動の大きい子ども（知能段階が四つまたは五つの段階に分散しているもの）のケースについて調べてみることにした。その結果をまとめてみると、

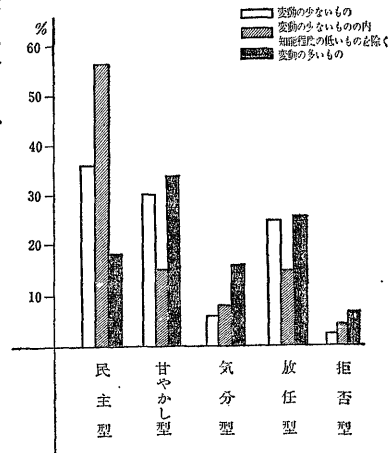
- (a) 両親が勤めに出て昼間は誰も家にいない家庭の子ども、
 - (b) 家に自営の会社があったり、商売をしている所の子ども、
 - (c) 母親の養育態度が放任的である子ども、
 - (d) 妹や弟の誕生した直後の子ども、
 - (e) 性格的にいらいらしている子ども、
- などがあげられた。

そこでこれらのことについて知能段階の変動の多い子どもと少ない子どものグループに分け両者の比較検討を試みることにした。

①家庭におけるしつけの問題

家庭におけるしつけの状態がどのような形でなされているか、親がどのような態度でしつけているかを考えるのに、親の養育態度を民主型、甘やかし型、気分型、放任型、拒否型の五つの型に分類して比較してみると第3表に示す通りである。この親の養育態度は、年少組の時の受持と年長組になつての受持が観察した結果をもとに

第3表 親の養育態度



して分類したものである。

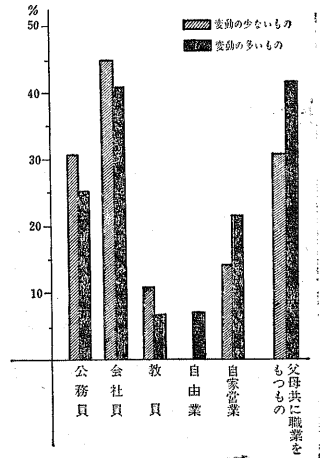
もちろん親の養育態度が純粹に一つの型にあてはまることは珍しく、むしろいろいろな型が混在しているのが普通であるから、比較的どちらの型に属するかに従つての分類であることは言うまでもないことである。

②家庭環境とくに親の職業

このことについては第4表に示す通りである。

この表によると、職業別には余り差が認められないが、ただ父母共に職業をもっているものや、商業や個人会社などの自家営業で昼間子どもをかまわなければならない家庭環境のものについては変動の多い子どもが多いようである。親に余りかまわなくてもらえず多少欲求不満になりやすい環境の中に育つ子どもは比較の変動が多い。このよう

第4表 親の職業



なことから親に余りかまってもらえない環境が変動の要因の一つとして考えられる。

その他家族構成、兄弟関係などについても調査してみたが、このことについては余り差を認めることはできなかった。しかし落ちついて生活できる環境にあるか、否かが変動の一要素のように感ぜられた。

③ 健康の問題や気分の問題

次に幼児の健康的な問題についてであるが、まず欠席状態を調べてみた。年間を通しての平均欠席日数については変動の少ないもの十五・五日、変動の多いもの十三・六日と余り差はない。またテストを実施した頃の平均欠席日数についてみると、変動の少ないものが四・四日、変動の多いものが三日となっており、両者の間には余り差が認められなかった。したがって欠席日数に関しては両者の間に差を認めるほどの関係はないということがいえる。

しかしテストを実施してみて感ぜられることは、テストをうける時の健康状態が強く影響しているのではないかとことである。しかしこのことについての個々の詳しいデータがとれなかったためはっきりしたことがいえないのは残念であるが、テストを実施する前、或いはテストをうける日の健康状態も変動の要因の一つとして考えられるのではないかと思われる。

このようなその日の健康状態と同時にもう一つ考えられることは、その日の気分的な問題があげられる。朝お母さんにきつく叱られ気分的に落ちついていない日にテストをうけた場合と、そうでない場合とでは大分違うようである。こうした幼児の気分の問題についての詳しいデータを示すにいたっていないが、このような情緒的なものも大いに考えねばならないことだと思った。これらのことについては更に研究を進めてみたいと思っている。

④ 性格の問題

次に変動の要因として考えられるものに、幼児の性格がある。幼児の性格調査として何を用いるかは重要な問題であるが、一応市販されている「幼児・児童性格診断検査」を利用することにした。できるだけ正直にかけひきなく記入して下さるよう特に配慮して、この調査の意味その他について幾度か母親と面接して検査用紙に記入してもらった。後で教師評価と比較してみたが一般にまじめに解答して下さったとみえ高い相関を得た。その結果のプロフィールをみると、一般に変動の多い子どもは、神経質で自制力なく、依存的

で、情緒的に不安定なものが多い。一方変動の少ない子どものプロフィールは、自制力もあり、自主的で情緒的にも安定した子どもが多いということがいえるようである。

三、結 び

以上の考察により、くい違いの要因として幼児をとりまく環境的なものとして、親の養育態度、両親の職業による家庭の雰囲気などがあげられ、子ども自身の問題として、聞く態度、その日の健康や気分、性格的なもの（依存性、自制力、情緒の不安定性）などがあげられることがわかった。

そして、これらのものに影響されて、現行の幼児知能検査（特に団体検査）においては子どもの知能がいつも正しく表現されているとは限らないということもわかった。

しかしこれらのことは、テストを受ける時の幼児が、テストを受ける状態になっているか否かの問題と、そのような場面に適応しやうい子どもであるか否かの問題に、要約されるように思われる。

もちろんこの外に

- (1) テスターの問題
- (2) テストの標準化の問題
- (3) テストそのものの問題

などの問題についても合わせ考えなければならぬ。

さて、このような問題をどのように解決すればよいか私たちにと

っては大切な問題である。

もちろん親も教師も平素の生活経験の中で望ましい態度の子どもにしつけるよう注意しなければならぬし、テスト作成者も、またテスト利用者もとくにこの点に注意しなければならないと思う。

また幼児はまだ未分化の段階でもあるので、幼児の知能測定においては、知能以外の要素、例えば情緒的なものが混入しやういことも考えなければならない。

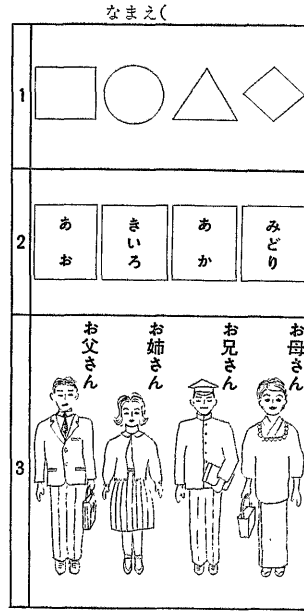
しかし、さきにも述べたように、テスト結果にくい違いが起りやういのは、テストを受ける状態になっている時にテストしたり、テストを受ける状態になっていない時にテストしたりするためにおこる場合が多いのであるから、まずテストするよりも、テストできるやうな状態に子どもがなっているかどうか見究めることが大切である。

もちろんテストするものとして、子どもがテストを受ける状態になっているかどうかをたしかめ、またテストを受けるやうな状態のもでテストするということが常識になっているが、実際問題としてこのことは団体検査の場合、とくに難かしいようである。

そこで、できることならこのやうなことが見分けられるやうなテストがつくられないものだろうかと思う。

例えばまず、幼児がテストを受ける状態になっているか否かを弁別する仕事として次のやうな問題をさせ、それに合格したものについてのみ本検査問題に移るといふやうな選別の問題をテストの前段

に入れるという方法はどうか。この問題作成で注意しなければならぬのは、知的に低い子どもでも聞いてさえおれば合格するというような、余り知的判断を必要とするものを入れないことである。そこで次のような問題を考えてみた。



- (1) この四つの形の中で三角に○をしましょう。とか、
- (2) この中で黄色はどれでしょう。
- (3) お兄さんはどの人でしょう。というような簡単な問題である。一度位できないのはよいが、二度も三度もできないという子どもには団体検査は無理で、個人検査を実施しなければならないのではないかと思う。

また現在の知能程度の表示法についても、幼児の場合いくら参考程度といっても知能指数や知能偏差値で表現すると、数の魔術にかかりやすいので、もっと大まかな段階のみで表示する方が望ましいということも大切なことだと思ふ。

いろいろ問題はあるにしても、現行のテスト形式の中で修正するとすれば、このような方法はもっとも簡単な方法のように思われる。

また幼児はあきやすい。それだけに余り時間をかけてはだめである。短時間に要領よくテストできることが要請される。

しかも幼児の生活経験は狭い。それだけに幼児の生活経験の中から最大公約数的問題として抽出される幼児知能検査の問題には自ら限界がある。このような事から練習効果という問題も起ってくる。

このようなことと、さきに考えた適応しやすい子どもであるか否かの問題と考え合わす時、現行のような形で、幼児の知能を測定して、細かな数字で知能程度を表示するよりも、もっと掘り下げて、幼児の知能測定の問題を考え直さなければならないのではないかと思ふ。

しかしこのことについてはまだ具体案もないので、今後の研究課題として研究してゆきたいと思つているが、例えば模倣できる段階の子ども、再生、再認のできる段階の子どもというような形で幼児の知能測定を考えてはどうかと思つている。

いずれにしても、私たちは変動の要因について深く研究することによつて、現行のテストを修正すると共に、もっと本質的に幼児の知能測定の問題を考えなければならない時期にきているように思ふ。

* * *

(財団法人幼児研究所 高松幼稚園)